

五十音図の成り立ち

かなを覚えるための、また辞書などの配列として、日本では「いろは歌」と並んで五十音図が利用されてきました。この五十音図はどのようにしてできたのでしょうか。

インドでヒンディー語やサンスクリット語で使われているデーヴァナーガリー文字は次のような配列になっています。その古形のシッダマートリカー文字（悉曇文字、いわゆる梵字）やベンガル、タミル、シンハラ文字やタイ、ビルマ文字など、祖形である紀元前のブラーフミー文字に由来するインドや東南アジアのどのブラーフミー系文字でも基本的に順序は同じです。（なお、子音文字は必ず母音 a を伴いますが、下表では省略します。）

अ a	इ i	उ u	ऋ ṛ	ॠ Ṛ	ए e	ओ o
आ ā	ई ī	ऊ ū	ॠ ṝ	ॡ Ṝ	ऐ ai	औ au
क k	ख kh	ग g	घ gh	ङ ṅ(ŋ)	軟口蓋音	
च c	छ ch	ज j	झ jh	ञ ñ(j)	硬口蓋音 チャ、チャ、ニャに近い	
ट ṭ	ठ ṭh	ड ḍ	ढ ḍh	ण ṇ(ṅ)	そり舌音 lに近い位置でタ、ダ、ナを発音	
त t	थ th	द d	ध dh	न n	歯音	
प p	फ ph	ब b	भ bh	म m	唇音	
य y	र r	ल l	व v	接近音（半子音・流音）		
श ś	ष ṣ	स s	ह h	摩擦音 ś ṣ s は c ṭ t に対応する歯擦音		

一見するだけで五十音図の配列に似ていることがわかりますね。同じ音は赤字で、少し違う音は茶色で示してあります。ワ行を v で表すのはよいとして（現在のヒンディー語でもこの字を w と読んでいます）、サ行の位置が c、ザ行が j、ハ行が p になっています。因みに s 字と h 字は別にあるので、サ行が s でも ś(sh) でもなくハ行が h でなかったことは明らかです。（なお z 字はなく、外来語では j に付加記号を付けて表しています。f などと同様です）

これは古代の日本語の発音が現在とは異なっていたことを示唆しています。この点を検討する別の資料として当時の漢字音があります。

中国では漢字の発音を示すために後漢末（2世紀末～3世紀初）から同じ声母（頭子音）の漢字と同じ韻母（母音＋末子音＋声調）の漢字の組合せで表す反切法（例えば、東 tuŋ を徳 t・紅 -uŋ 反で示す）が使われてきましたが、同じ発音の漢字をまとめた韻書という字書が三国時代から作られ始め、隋代の7世紀初頭に『切韻』として集大成されました。また少し遅れるようですが、『韻鏡』など、韻図という五十音図に相当する表（ただし声調の違いを含めて三千音以上、無視しても約千四百音）も作られています。これらによって6世紀以降の漢字の発音がかなり詳しくわかっています。実際の発音の比定は研究者によって特に母音の音価など若干異なっていますが、素人から見ればほとんど同じです。

中古漢字音の頭子音の体系は以下の通りです。

	全清	次清	全濁	次濁	全清	全濁	
重唇音	幫 p	滂 p ^h	並 b	明 m			
舌頭音	端 t	透 t ^h	定 d	泥 n			
半舌音				來 l			
齒頭音	精 ts	清 ts ^h	從 dz		心 s	邪 z	ツァ、ヅァ、サ、ザ
正齒音	章 tɕ	昌 tɕ ^h	常 dz		書 ɕ	船 z	チァ、ヂァ、シア、ジア
半齒音				日 ŋ			ニャ
牙音	見 k	溪 k ^h	羣 g	疑 ŋ			
喉音	影 ʔ			喻 h / j	曉 h	匣 h	

万葉仮名の中古漢字音から奈良時代の日本語の発音を推定することができます。ハ行はすべて重唇音 p 系の漢字で、当時は p と発音されていたと考えると問題ないと考えられます。沖縄の先島（宮古・八重山）では今でも花をパナなど日本語のハ行に相当する語が p に（一方、ワ行は b に）なっています。ヤハリ→ヤッパリや法被ハフヒ→ハッピーなどの音変化から考えても p 音の存在は問題ありません。語頭のハ行は17世紀初頭の『日葡字書』では f で表されており、平安時代から江戸時代初期まで現代語のファ行に当たる両唇摩擦音 φ で発音されていてその後 h に弱化したと、また語中のハ行は平安時代中期からワ行に当たる両唇接近音 β に転化し始めたと考えられています。

サ行とザ行も単純にチャ、チャカと思っていたのですが、実際に調べてみると万葉仮名の漢字音との対応はかなり複雑で、ツァ行が優勢ですがチャやシャも混ざっており、断定は難しい状況です。デーヴァナーガリー文字などのブラーフミー系文字では破擦音はチャ (ca) 系しかなくツァ系はないので、ツァを最も近いチャで表したとしてもおかしくありません。9世紀の慈覚大師円仁が、その著書『在唐記』の中で梵字 ca を「以本郷佐字音勢呼之」としています。（円仁は梵字の発音にも関心を持ち留学中にインド僧二人からも直接学んで丁寧に観察記録しています。例えば、p を「以本郷波字音呼之、下字亦然、皆加唇音」、ph を「波、断気呼之」、b を「以本郷婆字音呼之、下字亦然」、bh を「婆、断気呼之」、v を「以本郷婆字音呼之、向前婆字是重、今此婆字是軽」としています。）梵字 ca が（当時の）佐の日本漢字音に当たると言ってるのですが、佐の漢字音は tsa なので、サ行が ts と発音されていたとする説になります。当時の中国漢字音にはサ、シャ、ツァ、チャに近い音がみなありましたので、円仁の判断は信頼できるものと考えられます。（なお ɕa を「本郷沙字音呼之。但唇頗不大關、合呼之」としています。沙は中古漢字音では ɕa とされています。また、シは口蓋化している可能性も考えられますが、万葉仮名では精母 (ts) に属する文字も使われており、他段と事情は変わらないようです。）

1484年に成った日本の辞書というより語彙集というべき『温故知新書』ではサ行が梵字 s で表されているので、10～15世紀の間にサ行の発音が変わったようですが、それ以上詳しいことはわかりません。ただし、かなり早い時代から s 音への変化が始まっていたという説もあります。なお、セ、ゼは最近までシェ、ジェと発音されていました。したがって、推測をたくましくするなら、サ行は古代には tsa、tʃi、tsu、tʃe、tso であったのが、破擦音が次第に弱体化して15世紀末までに摩擦音 sa、ʃi、su、ʃe、so に変わったと考えてよいかと思えます。

いずれにせよ、五十音図がブラーフミー系文字の字母表に基づいて作られたことは疑いの余地がないと考えられます。では、いつ作られたのでしょうか。

ブラフミー系文字の字母表がインドでいつ作られたかはわかりませんが、紀元前の大文法学者パーニニの頃にはほぼ成立していたと考えられます。インドでは祭祀実践のための補助学問として大昔から文法学と音声学が発達し、この字母表の配列も音韻研究に基づく合理的なものです。(仏教の基礎学問五明のうちの声明は、現在では仏教声楽の一種の意味で使われていますが、本来は文法学・音声学の意味です。) 梵字(悉曇文字)の字母表は仏教で「悉曇章」と呼ばれており、最初に示したデーヴァナーガリーの配列と同じ配列です。サンスクリットには二字三字からなる複子音が多数あり、その書き方の解説が悉曇章の主な眼目です。

板卒塔婆でよく目にする梵字が日本にいつ伝わったかですが、8世紀奈良時代には確実に伝わっていたと考えられます。早くは道昭が653年に入唐して玄奘三蔵(602-64)に師事し、天平年間になる法隆寺伝来の梵語般若心経貝葉写本には梵字字母の一覧が記されており、また736年に南インドのマドゥライ出身の婆羅門僧正菩提僊那(703-60年)が来日しています。密教の呪文(真言、陀羅尼)を唱えるには梵字の読み書きが必須なので悉曇学は重んじられてきたようで、880年には悉曇章に関する日本人の論書である安然著『悉曇藏』も出ています。ただし梵文を読みこなすまではいかなかったと思われる。

では五十音図はいつできたのでしょうか。平安初期に空海や最澄あたりの留学僧が悉曇文字を知って日本語に当てはめたのかと最初は思っていました。この問題もそう簡単ではなかったようです。現在残っている最古の図は『孔雀経音義』の11世紀初頭写本に付されたものですが、段がイオアエウ、行がカサタヤマハワラと、ア行とナ行が欠けているうえに順序がかなり違っています。11世紀末には全行の揃った『金光明最勝王経音義』(1079年)が残っていますが、やはり行の順序は現在とは違います。(実は、「いろは歌」も同書に記載のものが最古だそうです。)

次いで明覚上人(1056-1122以降)の著『反音作法』(1093年)、『梵字形音義』(1098年)、『悉曇要訣』(1101年)中の図がありますが、いずれも行の順序が現在のものとはかなり違っています。上人は今と同じ五十音図を作ったのではないが、日本語の音節を整理して子音別、母音別に系統的に並べて表すという五十音図の原理を確立した、名前の残っている最初の人であることは間違いありません。明覚上人の起居した温泉寺のある石川県山代温泉では近年「五十音図発祥の地」として地域おこしをしているそうです。

現在と同じ順序が見られるのは『韻鏡』を再発見した13世紀末の明了房信範(1223-96?)の『十四音説』からと言われ、その弟子了尊の『悉曇輪略図抄』(1287年)中の五十音図や賢宝(1333-98)『悉曇字紀創学抄』が続き、1462年写本『悉曇初心抄』所載の「直音拗音の図」でもア行とワ行の混乱は見られるもののそれ以外は現在と同じになっています。

これまでの話は全て山の上の悉曇学の学僧達の間での話だったのですが、15世紀になって摂政・関白一条兼良(1402~81)著『假名遣近道』で、また日本語辞書である天文(1532-55)本『和名類聚抄』巻頭の「字切」で世俗の世界にも知られるようになりました。

9世紀前半に遣唐使の派遣が絶え、上記の円仁が最後の留学僧となりました。そしてサンスクリットや漢語の発音を実際に学ぶことも不可能になりました。実はこれまでの学僧達の努力は、日本語の音韻体系を定式化するためではなく、実際の発音を知らない中で読経に必要なサンスクリットや漢語の発音をどう学習すればよいかという苦闘だったのです。音図は比叡山延暦寺の読経法の中で生まれて漢字音の反切のために使用されてきましたが、他のお経は呉音で読むのに孔雀王呪経だけは漢音で読まなければならなかった事情が絡んでいたと言われています。

『五韻次第』と題する1665年筆写の成立年代も著者も不明の写本があり、その巻頭に漢字(真仮名)で書い

た五十音図が載っています。表題の下に「天台座主良源（元三大師 912-85）伝本」、巻末近くに「此の伝授、…阿闍梨道命（974-1020）御相承也。」とあり、書中に「堀川天皇御宇、長治年中（1104-06）、賀州温泉寺、明覚三蔵云々」とあって、同書の成立は少し遅れるにしても慈恵大師以来の伝承を伝えているように見えます。しかし、図に用いた真仮名が『反音作法』、『假名遣近道』、「字切」と互いに一字しか変わらず、行の配列は『假名遣近道』のみと一致することから、その五十音図はもっと遅い時期のものであると結論されました。

図表の形ではありませんが、上記の1484年の語彙集『温故知新書』では頭字を今と同じ五十音順に分け、各頭字ごとに、最初に梵字、後は12の分野別に単語13000を列挙しカナを振ってあります。サ行はcではなくsで、ハ行はpで表してあります。ただ、ヤ行に ya, yi, yu, ye, yo、ワ行にも wa, wi, wu, we, woがあります。また清濁を区別せず、カナにも濁点は使われていません。

鎌倉時代末までに発音の区別が失われてきたため、中世以来、ア行、ヤ行、ワ行の区別が乱れていました。鎌倉時代の始めに藤原定家がそれ以降の仮名遣いの規範となる「定家仮名遣い」を定めたのもこの混乱を整理するためでしたが、やはり誤謬は免れませんでした。

図表の形で悉曇章と同じ現在の順序の図が現れたのはやっと17世紀末になってからで、浄厳著『悉曇三密鈔』（1682年）にあるものです（ただしア行とワ行の混同は残ったまま）。それが浄厳の友人である国学者契沖によって一挙に広まったようです。契沖『和字正濫鈔』（1695年刊）ではワ行は正しくヰ、ヱ、ヲとなっていますが、ア行の e とヤ行の ye は江で書いてあります。この状態は、本居宣長が『字音仮字用格』（1776年刊）で正すまで続きました。宣長はどの考察でも清朝の考証学派にも劣らない非常に緻密な分析を行っています。最も早く消滅した e と ye の区別は、加賀藩年寄奥村栄実が『古言衣延弁』（1829年）で10世紀半ばまで残っていたことを明らかにしました。

こうした影響を受けたものか、1718年初演の歌舞伎十八番『外郎売』に次のような言葉が出てきます。舌がよく回るようになるという薬の宣伝文句の中で、早口言葉と並んで「(さて此の薬、第一の奇妙には、舌の廻る事が錢ごまが裸足で逃げる。ヒョッと舌が廻り出すと矢も盾も堪らぬじゃ。そりゃそりゃそらそりゃ、廻って来たわ、廻って来るわ。) アワヤ喉、サタラナ舌に、カ牙サ歯音、ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、アカサタナハマヤラワ、オコソトノホモヨロヲ…」とあるそうです。これは韻鏡1628年？刊本巻頭の五十音図（ヤ行の yi と ye がヰ、ヱと書いてあり、ワ行の wi と we がア行と同じイ、エとなっている）の解説と前半が同じで、同系統の書物から引いてきたようです。歌舞伎作者というのは様々な書物に目を通しての教養人でないと務まらなかったのですね。

発音の仕方を重んずる謡曲や浄瑠璃節諸流など音曲の世界でも音図は重視されてきました。『管弦音義』（1185年）、『塵芥抄』（謡伝書、1583年）、『金春流曲法秘伝書（延徳二年（1490）常門彦次郎相伝元安音曲伝書）』、『謡曲英華抄』（1766年）など音図を添えた伝書が伝わっています。

そして明治初期に文字学習の柱として学校教育に取り入れられることになり、五十音図の成り立ちを巡る長い長い物語は終わりとなります。